

## 第2章 観光立国の意義および訪日外国人観光客の入出国空港等に関する特性分析<sup>1</sup>

### はじめに

この数年の間に観光を目的とした訪日外国人が増加している。例えば、高山は日本の原風景のような懐かしさを感じさせてくれる町並みのある観光地であり、近年、欧米から多くの観光客が訪れている。また、福岡空港に近い太宰府天満宮には、近隣のアジア諸国から多くの若い観光客が訪れている。あるいは、成田空港に近い成田山新勝寺では、純日本的な町並みに様々な国から観光客が訪れ、エキゾチックな雰囲気である。

ところで、今日、地方経済の低迷が言われて久しい。観光の振興を通じて、地域の活性化を図り、個性豊かな地域づくりを進めることは、地域振興の有効な手段の一つであり、課題でもある。ここでは、まず訪日外国人客を増やすことで観光立国を推進する意義について考察する。次に、訪日外国人がどの空港から入国し、どこを観光地を訪れる傾向があるのか、さらに興味のある観光資源の対象は何であるかを明らかにするために、日本政府観光局による2009年訪日外客訪問地調査<sup>2</sup>のデータを、多変量解析手法の一つである主成分分析手法に応用する。

### 観光立国の意義と課題

#### 1 観光産業の我が国経済への波及効果

2003年（平成15年）4月には訪日促進キャンペーンが「ビジット・ジャパン・キャンペーン」として開始され、2006年（平成18年）12月には「観光立国推進基本法」が成立した。2007年（平成19年）6月に閣議決定された「観光立国推進基本計画」では、「観光立国の実現」は、21世紀の我が国経済社会の発展のために不可欠な国家的課題とされている。また、2009年（平成21年）12月に閣議決定した政府の「新成長戦略（基本方針）～輝きのある日本～」において、観光

立国の推進は6つの成長戦略分野の1つとして位置づけられている。では、観光が日本経済へ影響を及ぼす波及効果はどのようにになっているか。

国土交通省「平成20年度旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究」によれば、15,000人を対象として「旅行・観光消費動向調査」を実施し、日本における旅行消費額を推計し、2005年（平成17年）産業連関表を用いて2008年（平成20年）度の旅行消費が日本にもたらした経済波及効果を推計している。（図1参照）

これによれば、日本で支払われた旅行消費額は総額23.6兆円であり、内訳は、国内宿泊旅行で15.6兆円、国内日帰り旅行で4.9兆円、海外旅行のうち国内分1.7兆円、訪日外国人旅行1.3兆円である。旅行消費の経済波及効果は国内生産額の5.3%に当たる51.4兆円であり、付加価値誘発効果は26.5兆円に及ぶ。また、雇用誘発効果としては430万人であり、2007年（平成19年）度就業者数6,445万人（内閣府「国民経済計算年報」）の6.7%を占めている。税収効果は、4.6兆円と試算され2008年（平成20年）度税収見込み額（国税と地方税の合計）86.3兆円の5.3%に相当する<sup>3</sup>。

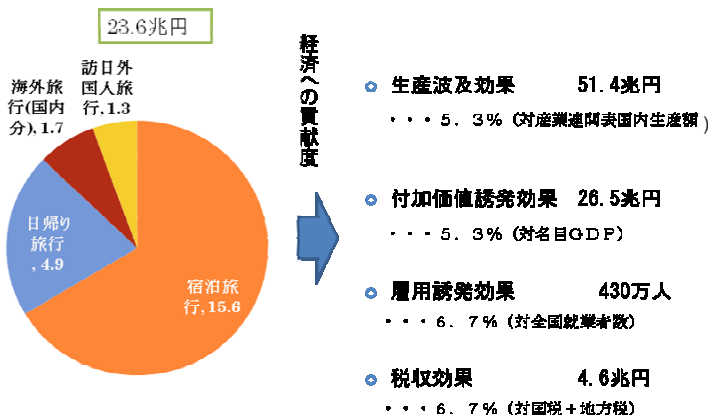


図1 旅行消費額（国内）と波及効果（平成20年度）

資料）国土交通省（平成20年度旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究）による。  
国土交通省観光庁のホームページ情報・資料>統計情報から掲載

このように観光産業は極めて裾野の広い産業であり、その他の産業へ波及効果が大きく、雇用誘発効果の高い産業である。

## 2 旅行者数等の推移

国内宿泊旅行、海外旅行（国内分）、訪日外国人旅行の各々について、最近の旅行者数の推移は次のとおりである。

まず、国内宿泊旅行の推移については、一人当たりの年間宿泊回数および宿泊数は図2のとおり推移し、2003年以降は横ばいしないし、低下傾向が続いている。

次に、日本人の海外旅行者数については、図3のとおり推移し、2000年まで右肩上がりに伸びてきたが、2001年の9.11事件に続き、アフガニスタン紛争、イラク戦争、2003年のSARSの発生というマイナス要因が立て続けに発生し、これまでにない落ち込みをみせた。2004年からは、回復基調に転じ、ようやく2006年には約1,754万人となったが、2007年以降減少に転じている。

訪日外国人旅行者数については、2003年のビジット・ジャパン・キャンペーンの開始以来一貫して増加し、リーマンショックの影響で2009年は減少に転じたが、2010年は再び回復し、1月から前年実績を大きく上回り過去最高の旅行者数となる見込みである。図4の訪日外国人数の推移については、2010年は1月

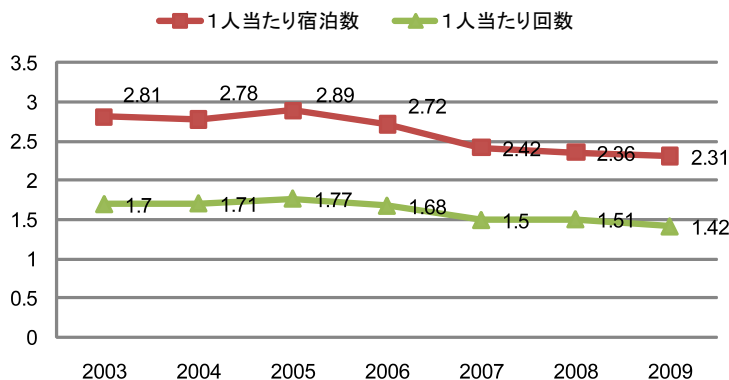


図2 国内宿泊観光旅行の回数及び宿泊数の推移

資料) 国土交通省観光庁「旅行・観光消費動向調査」による。

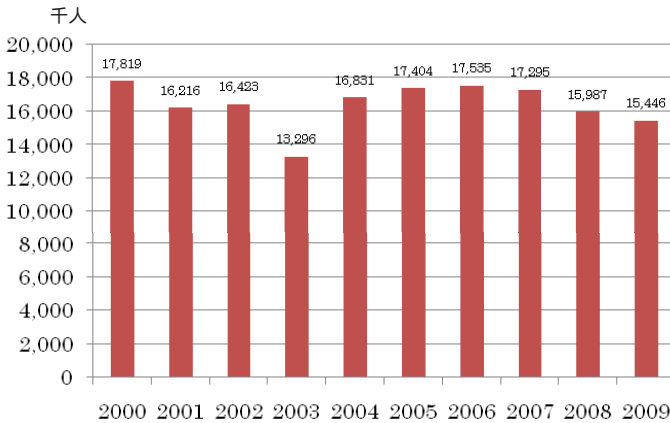


図3 日本人の海外旅行者数の推移

資料) 法務省及び(独)国際観光振興機構資料に基づき観光庁作成資料による。

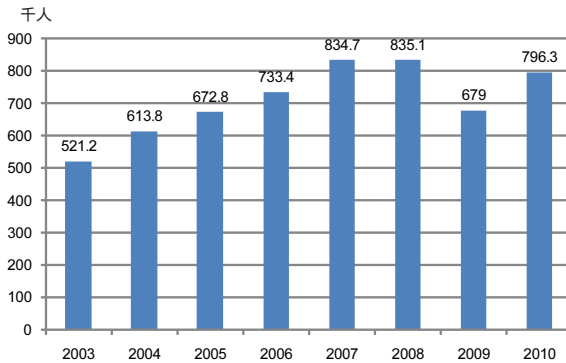


図4 訪日外国人数の推移

資料) 日本政府観光局(JNTO)2010年訪日外客数による。

2010年は1月から11月分まで、10月および11月は日本政府観光局の推計値

から11月まで分であり、12月が前年度並みであっても過去最高数となる見込みである。

### 3 主要国における旅行消費額の比較

観光産業の GDP に占める割合，雇用 に占める割合をあらわしたものが図 5 および図 6 である。スペイン，オーストリアなど国境を接している欧州諸国が GDP，雇用共に高い割合を占めるが，オーストラリア，米国，カナダと比べても日本の観光産業の占める割合が著しく低くなっている。なお，GDP は，国際比較をするため UNWTO が提唱する観光経済の計算手法である国際基準 TSA (Tourism Satellite Account) により計算されたものである。前述の旅行消費額と比較して土産品や日用品等の購入は観光売上とみなされないため，金額は少なくなっている。

図 7 は旅行消費額の国民と外国人の比を示したものである。前述と同様に欧州諸国で外国人の比率が高いが，オーストラリア，米国，カナダと比較しても日本の外国人比率が著しく低くなっている。日本の観光産業については，外国人の旅行者数の比率が低いことが，GNP に対する比率や雇用者数に対する比率が低い一因であると推測される。

国内旅行者や日本人の海外旅行者数が横ばいの状況である中で，訪日外国人旅行者数は順調に伸びており，諸外国の外国人の旅行消費比率が日本と比較して高

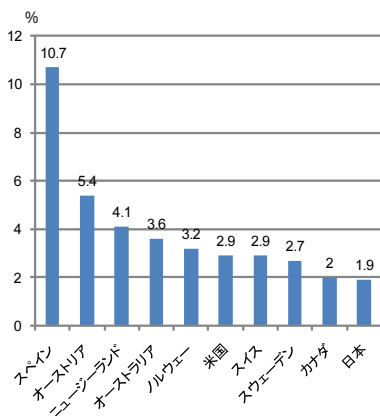


図 5 観光 GDP の GDP に占める割合

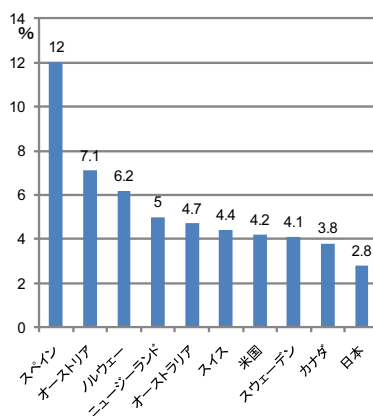


図 6 産業観光の雇用割合

資料) 日本交通学会シンポジウム観光庁講演資料から

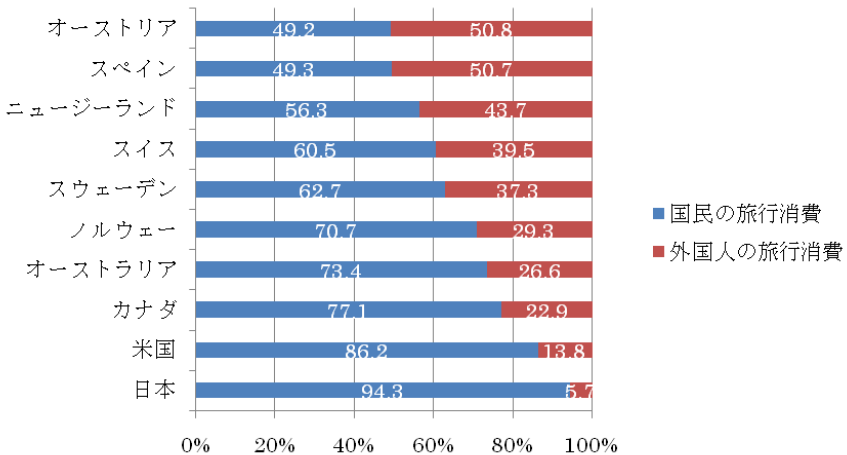


図7 主要国における旅行消費額の国民・外国人比率

資料) 22年版観光白書から掲載

いことから、訪日外国人数の伸びる余地、伸び代が十分にあると推測される。

#### 4 観光立国の意義

観光立国の意義としては、次のことがあげられる。

まず、近隣諸国を始めとした諸外国からの訪日観光客（旅行者）が増加することは日本の文化に理解を深めてもらう機会であり、こうした国際観光による草の根交流は、国家間の外交を補完・強化するものであり、国際観光の推進は日本のソフトパワーを強化するものであると言える。

また、前述のように、旅行消費額は、生産波及効果、雇用効果が大きく、少子高齢化により成熟した今の社会では、観光振興による交流人口の拡大は、需要の創出による経済の活性化に有効であり、観光の振興が、少子高齢化時代の経済活性化の切り札となる。

次に、観光による交流人口の拡大は、地域経済の活性化の起爆剤となることができる。観光に訪れたいと思うような集客力のある個性豊かな地域づくりは、各地域の自主・自律の精神を促すものとなる。

さらに、観光立国を推進することで、日本の歴史的・文化的価値を再認識するプロセスとなり、日本の魅力の再活性化につながるものである<sup>4</sup>。

## 訪日外国人と空港

日本を訪れる外国人客がどこの空港を利用して、どの地域を訪問している傾向があるのか。また、観光客が属する国・地域により違いがあるのかという点を主成分分析の手法を応用して分析を試みる。データは2009年の日本政府観光局(JNTO)による訪日外客訪問地調査の資料を用いて行う。この資料は22年版観光白書の2009年分の訪日外客数の動向と比較し、利用した空港(港)の割合、あるいは訪日外国人の属する国・地域の割合がほぼ同じであるため、この標本を使用して分析を行った。

まず、訪日先として調査の対象となった観光地のうちで1%以上が訪問している地域59か所の訪日外国人旅行者数を変数として、入出国した空港(港)利用者数を主成分分析した。

次に、変数を訪日外国人の属する国・地域の訪日旅行者数として、入出国に利用した空港(港)利用者数を主成分分析した。

さらに、変数を訪日外国人の属する国・地域の訪日旅行者数として、1%以上が訪問している地域59か所の訪日旅行者数を主成分分析した。

### 1 訪問先(観光地)を成分負荷量とした入出国(港)の主成分分析

訪日外客訪問地調査により、訪れた都道府県別に最も入出国者数の多い空港(港)ごとに色分けすると図8のとおり、新千歳、成田、関西、中部、福岡、那覇の6空港の勢力圏に分けられる。このことから成分数を6と指定して、各成分の解釈をわかりやすくするため直行回転のバリマックス法を採用した。成分負荷量表は表1、成分得点表は表2のとおりである。

分析の結果、第1成分から第6成分までで、約99%を説明している。第1成分は約58%を説明し、中部地区と関西地区を除く本州で強く作用している。成分得点は成田空港が高く、本州地区成田空港に関する成分と推定される。

国土地理院承認 平14総機 第149号

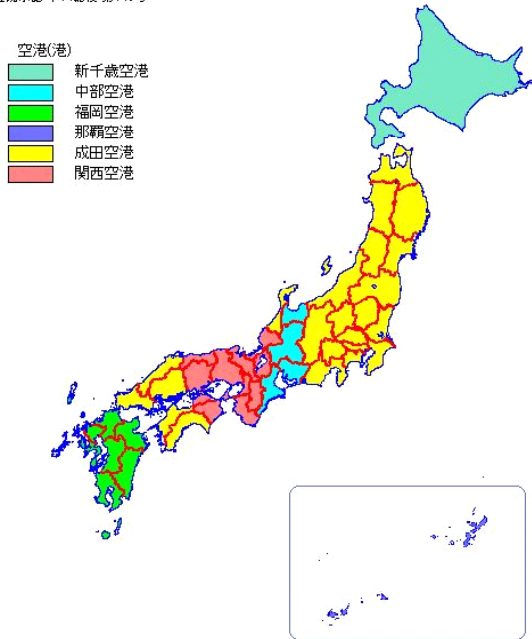


図8 訪問先都道府県別に最も利用した空港  
資料) JNTO 訪日外客訪問地調査による。

第2成分は約13%を説明しており、九州地区で強く作用している。成分得点は福岡空港と博多港が高く、九州に関する成分と推定される。

第3成分は約12%を説明しており、北海道地区で強く作用している。成分得点は新千歳空港が高く、北海道新千歳空港に関する成分と推定される。

第4成分は約10%を説明しており、関西地区で強く作用している。成分得点は関西空港が高く、関西地区関西空港に関する成分と推定される。

第5成分は約3%を説明しており、沖縄で強く作用している。成分得点は那覇空港が高く、沖縄那覇空港に関する成分と推定される。

第6成分は約3%を説明しており、中部地区で強く作用している。成分得点は中部空港が高く、中部地区中部空港に関する成分と推定される。



表1 主成分負荷量表

成分 観光地	1	2	3	4	5	6
1 札幌・定山溪	0.234	-0.114	0.964	0.012	-0.037	0.000
2 小樽	0.033	-0.114	0.991	-0.039	-0.039	-0.016
3 登別	-0.058	-0.107	0.989	-0.068	-0.038	-0.020
4 洞爺湖	0.134	-0.113	0.982	-0.043	-0.036	-0.002
5 函館	0.289	-0.122	0.936	-0.002	-0.057	-0.035
6 旭川	0.104	-0.119	0.984	-0.024	-0.042	-0.032
7 富良野・美瑛	0.062	-0.113	0.988	-0.043	-0.039	-0.034
8 仙台	0.919	-0.111	-0.013	0.008	-0.111	-0.088
9 浅草	0.981	-0.002	0.067	0.160	0.022	0.077
10 上野	0.990	0.000	0.069	0.100	0.020	0.067
11 秋葉原	0.981	-0.001	0.064	0.165	0.022	0.078
12 東京ドーム・神保町周辺	0.991	0.000	0.072	0.081	0.023	0.068
13 東京駅周辺・丸の内・日本橋	0.989	-0.009	0.061	0.112	0.013	0.069
14 皇居	0.972	0.004	0.070	0.197	0.028	0.091
15 銀座・有楽町	0.984	-0.003	0.066	0.146	0.020	0.072
16 築地	0.989	0.007	0.074	0.098	0.029	0.073
17 お台場	0.988	-0.017	0.059	0.113	0.005	0.051
18 品川	0.990	-0.006	0.064	0.101	0.017	0.067
19 東京タワー	0.986	-0.002	0.066	0.130	0.021	0.078
20 赤坂	0.992	-0.002	0.067	0.087	0.019	0.062
21 六本木	0.990	-0.002	0.068	0.097	0.022	0.067
22 池袋	0.991	-0.003	0.066	0.092	0.018	0.065
23 新宿	0.988	-0.014	0.061	0.120	0.010	0.059
24 原宿・明治神宮	0.991	-0.009	0.063	0.095	0.013	0.057
25 渋谷	0.990	-0.007	0.065	0.095	0.017	0.064
26 代官山・恵比須	0.992	-0.019	0.057	0.061	0.005	0.041
27 自由が丘	0.991	-0.019	0.066	0.056	0.005	0.038
28 下北沢	0.992	-0.017	0.056	0.064	0.005	0.046
29 吉祥寺・三軒(ソフィア美術館)	0.992	-0.004	0.063	0.076	0.015	0.066
30 八王子(高尾山)	0.991	0.004	0.067	0.064	0.022	0.094
31 日光・鬼怒川	0.987	-0.003	0.067	0.107	0.023	0.082
32 千葉市・幕張	0.985	0.008	0.075	0.126	0.031	0.076
33 TDR	0.971	-0.003	0.067	0.194	0.021	0.079
34 成田	0.979	0.018	0.084	0.141	0.042	0.083
35 横浜	0.985	-0.012	0.060	0.139	0.012	0.056
36 鎌倉	0.988	0.007	0.075	0.096	0.032	0.079
37 箱根	0.961	-0.013	0.054	0.245	0.014	0.084
38 金沢	0.651	-0.151	-0.074	0.279	-0.088	0.676
39 富山(富山五箇山・富山魚・ハイランド)	0.951	-0.003	0.060	0.268	0.022	0.090
40 高山	0.743	-0.114	-0.037	0.153	-0.054	0.630
41 名古屋	0.332	-0.175	-0.121	0.140	-0.117	0.895
42 京都市	0.611	-0.042	-0.012	0.782	-0.011	0.104
43 大阪市	0.288	-0.062	-0.050	0.951	-0.030	0.055
44 USJ	0.078	-0.092	-0.071	0.987	-0.042	0.049
45 神戸・有馬温泉	0.105	-0.080	-0.067	0.987	-0.036	0.030
46 姫路	0.610	-0.048	-0.010	0.784	-0.009	0.088
47 奈良市	0.499	-0.042	-0.024	0.859	-0.016	0.090
48 広島市	0.922	0.049	0.045	0.351	0.020	0.111
49 宮島	0.951	0.019	0.058	0.269	0.026	0.109
50 福岡市	0.104	0.988	-0.097	-0.022	-0.037	-0.023
51 大宰府	-0.154	0.907	-0.137	-0.085	-0.086	-0.098
52 別府	0.097	0.981	-0.109	0.010	-0.053	-0.033
53 湯布院	-0.136	0.976	-0.110	-0.097	-0.046	-0.051
54 長崎市	0.294	0.915	-0.049	0.009	0.001	0.045
55 ハウステンボス	-0.135	0.972	-0.099	-0.094	-0.031	-0.041
56 熊本市	0.033	0.992	-0.099	-0.029	-0.036	-0.024
57 阿蘇山	-0.085	0.985	-0.115	-0.026	-0.049	-0.041
58 那覇	0.190	-0.132	-0.122	-0.049	0.962	-0.059
59 沖縄本島	-0.011	-0.172	-0.140	-0.070	0.969	-0.080
寄与率	58.1	13.0	11.8	9.7	3.3	3.2
累積寄与率	58.1	71.1	82.9	92.6	95.9	99.1

表2 主成分得点表

成分 空港(港)		成分					
		1	2	3	4	5	6
入国	新千歳空港	-0.549	-0.302	2.769	-0.215	-0.105	-0.111
	仙台空港	-0.196	-0.741	-0.593	-0.506	-0.779	-0.891
	成田空港	2.823	0.048	0.191	0.140	0.126	0.327
	羽田空港	0.037	-0.692	-0.430	-0.551	-0.673	-0.851
	中部空港	-0.432	-0.525	-0.443	-0.443	-0.386	2.534
	関西空港	-0.392	-0.129	-0.246	2.854	-0.123	-0.142
	福岡空港	-0.340	2.348	-0.157	-0.227	0.037	0.021
	博多港	-0.310	1.025	-0.373	-0.334	-0.395	-0.415
	那覇空港	-0.372	-0.520	-0.407	-0.359	2.801	-0.253
	その他	-0.285	-0.537	-0.331	-0.380	-0.554	-0.281
	不明	-0.254	-0.663	-0.558	-0.440	-0.581	-0.616
出国	新千歳空港	-0.563	-0.281	2.912	-0.204	-0.080	-0.085
	仙台空港	-0.184	-0.745	-0.586	-0.509	-0.803	-0.912
	成田空港	2.953	0.099	0.328	0.151	0.147	0.145
	羽田空港	0.023	-0.707	-0.522	-0.570	-0.662	-0.847
	中部空港	-0.459	-0.517	-0.432	-0.479	-0.374	2.903
	関西空港	-0.465	-0.371	-0.232	2.879	-0.111	0.050
	福岡空港	-0.356	2.652	-0.127	-0.149	0.117	0.070
	博多港	-0.305	1.081	-0.357	-0.302	-0.374	-0.388
	那覇空港	-0.374	-0.523	-0.408	-0.357	2.772	-0.257

上記を表にまとめたものが、表3である。広島および宮島が中国地方でありながら、第1成分の成田空港で強く作用していること、金沢および高山が第1成分の成田空港と第6成分の中部空港の両方に0.8未満0.6以上でやや強く作用していること、同様に京都および姫路が第1成分の成田空港と第4成分の関西空港の

表3 観光地を成分負荷量とした各入出国空港(港)の主成分分析

成分	変数(観光地)		成分得点1以上
	プラス(0.8以上)の作用	プラス(0.6以上)の作用	
第1	仙台、日光、首都圏内27か所、箱根、富士山、広島、宮島	金沢、高山、京都、姫路	成田空港
第2	福岡、湯布院、阿蘇山など九州地区8か所	なし	福岡空港、博多港
第3	札幌、小樽など北海道内7か所	なし	新千歳空港
第4	大阪、USJ、神戸、奈良	京都、姫路	関西空港
第5	那覇、沖縄本島	なし	那覇空港
第6	名古屋	金沢、高山	中部空港

両方に 0.8 未満 0.6 以上でやや強く作用していることが注目される。それぞれの国・地域の旅行者にとって訪れたい観光地ではあるが、近くに空港がない場合に、新幹線あるいは高速道路を使って移動しているものと推測される。また、入国と出国を分けて実施したが、成分得点表で目だった差異は認められなかった。

## 2 国・地域を成分負荷量とした場合の入出国空港（港）の主成分分析

訪日旅行者の属する国・地域によって、どの空港を利用している傾向があるのか、旅行者の属する国・地域を変数として入出国空港（港）を分析する。成分負荷量表は表 4、成分得点表は表 5 のとおりである。なお、前述と同様に第 2 成分以降の成分の解釈をしやすくするため、成分数を 3 と指定し、バリマックス法による直行回転を行った。

第 1 成分から第 3 成分までで、約 99% を説明している。第 1 成分は約 57% を説明し、欧米地域で比較的強く作用している。成分得点は成田空港が高く、欧米地域に関する成分と推定される。

第 2 成分は約 25% を説明しており、韓国を除くアジア地域で強く作用している。成分得点は新千歳空港、成田空港、中部空港、関西空港と高く、空港が分散

表 4 主成分負荷量表

成分 国・地域	1	2	3
韓国	0.302	0.264	0.915
台湾	0.604	0.716	0.330
中国	0.621	0.611	0.475
香港	0.726	0.554	0.352
タイ	0.625	0.647	0.424
マレーシア	0.748	0.532	0.391
シンガポール	0.785	0.493	0.374
インド	0.812	0.468	0.345
オーストラリア	0.809	0.459	0.364
米国	0.851	0.414	0.323
カナダ	0.881	0.359	0.308
英国	0.857	0.402	0.321
ドイツ	0.776	0.515	0.353
フランス	0.782	0.505	0.359
ロシア	0.871	0.390	0.275
その他	0.819	0.456	0.346
寄与率	57.1	24.9	17.3
累積寄与率	57.1	81.9	99.2

表5 主成分得点表

成分		1	2	3
入国	新千歳空港	-0.35799	0.49084	-0.78096
	仙台空港	0.08527	-0.43886	-0.92711
	成田空港	2.85216	0.55303	0.76675
	羽田空港	-0.4442	-1.40737	1.75829
	中部空港	-0.34705	0.56864	-0.66272
	関西空港	-1.52859	2.2026	1.21403
	福岡空港	-0.32185	-0.38997	0.25679
	博多港	-0.07047	-1.11394	0.35109
	那覇空港	-0.0516	0.0286	-1.12444
	その他	0.14157	-0.48044	-0.89081
	不明	0.20836	-0.46901	-1.06313
	出国	新千歳空港	-0.34662	0.44242
仙台空港		0.07497	-0.4656	-0.86369
成田空港		2.45434	1.26291	0.86456
羽田空港		-0.41428	-1.51541	1.77946
中部空港		-0.32482	0.56487	-0.69283
関西空港		-1.15792	1.74778	1.1108
福岡空港		-0.3591	-0.44925	0.40673
博多港		-0.04007	-1.1744	0.39003
那覇空港		-0.05212	0.04257	-1.14379

している特徴がある。アジア地域に関する成分と推定される。また、成田空港の成分得点が、入国より出国が高くなっている特徴がある。出国の前に東京を訪れていることが推測される。

表6 国・地域を成分負荷量とした入出国空港（港）の主成分分析

成分	変数（国・地域）		成分得点	
	プラス（ $\geq 0.8$ ）の作用	プラス（ $0.8 > \geq 0.6$ ）の作用	$> 1.0$	$1.0 > \geq 0.5$
第1	カナダ、ロシア、英国、米国、インド、オーストラリア、その他	シンガポール、フランス、ドイツ、マレーシア、香港、タイ、中国、台湾	成田空港（入出国）	なし
第2	なし	台湾、タイ、中国	関西空港（入出国） 成田空港（出国）	中部空港（入出国） 成田空港（入国）
第3	韓国	なし	羽田空港（入出国） 関西空港（入出国）	成田空港（入出国）

第3成分は約17%を説明しており、韓国で強く作用している。成分得点は羽田空港、関西空港、福岡空港、博多港で高く特に羽田空港で高い成分得点を得ている。韓国と日本の距離や航路、航空便との関連があるものと推測される。

強く作用する変数および高い成分得点を抜粋すると表6のとおりである。

### 3 国・地域を主成分負荷量とした訪問地（観光地）の主成分分析

訪日旅行者の属する国・地域により訪れる観光地の傾向をみるため、旅行者の属する国・地域の訪日旅行者数を変数として各訪問地（観光地）を主成分分析した。前述と同様に成分数を3に指定し、第2・第3成分の解釈を分かりやすくするためバリマックス法による直行回転を行った。成分負荷量表は表7、成分得点表は表8のとおりである。

第1成分から第3成分までで、約98%を説明している。第1成分は約44%を説明し、比較的欧米地域で強く作用している。成分得点は東京周辺の地域が高い得点を上げており、東京以外では、京都と広島成分得点が高くなっている。東京ディズニーランド、小樽、札幌は大きくマイナスになっている。

第2成分は約39%を説明しており、アジア地域で比較的強く作用している。

表7 主成分負荷量表

成分	1	2	3
国・地域			
韓国	0.475	0.825	0.247
台湾	0.388	0.837	0.369
中国	0.509	0.527	0.664
香港	0.471	0.826	0.258
タイ	0.512	0.706	0.466
マレーシア	0.589	0.633	0.486
シンガポール	0.582	0.704	0.374
インド	0.620	0.538	0.545
オーストラリア	0.766	0.558	0.298
米国	0.695	0.636	0.306
カナダ	0.757	0.555	0.325
英国	0.809	0.502	0.294
ドイツ	0.706	0.611	0.331
フランス	0.858	0.407	0.266
ロシア	0.785	0.361	0.445
その他	0.807	0.472	0.346
寄与率	43.7	38.7	15.4
累積寄与率	43.7	82.4	97.8

表8 主成分得点表

観光地	成分	1	2	3
札幌・定山溪		-1.018	0.706	0.142
小樽		-1.047	0.588	-0.180
登別		-0.817	0.200	-0.304
洞爺湖		-0.857	0.119	-0.017
函館		-0.740	0.075	-0.268
旭川		-0.752	0.091	-0.297
富良野・美瑛		-0.924	0.320	-0.231
仙台		-0.624	-0.039	-0.209
浅草		0.914	-0.324	2.080
上野		1.096	0.158	-0.210
秋葉原		0.835	-1.653	3.691
東京ドーム・神保町周辺		-0.061	-0.256	-0.362
東京駅周辺・丸の内・日本橋		0.951	-0.460	-0.336
皇居		1.683	-1.846	1.699
銀座・有楽町		2.363	-1.134	1.498
築地		0.457	-0.232	-0.933
お台場		-0.412	0.325	0.774
品川		0.627	-0.572	-0.001
東京タワー		1.114	-1.272	1.489
赤坂		0.770	-0.512	-0.856
六本木		2.186	-0.643	-1.053
池袋		-0.086	0.445	-0.333
新宿		1.586	1.396	-0.280
原宿・明治神宮		1.569	0.591	-1.961
渋谷		2.960	-0.090	-2.380
代官山・恵比須		-0.095	0.044	-0.922
自由が丘		-0.603	-0.075	-0.356
下北沢		-0.489	-0.226	-0.288
吉祥寺・三軒(ソフィア美術館)		-0.278	-0.120	-0.562
八王子(高尾山)		-0.503	-0.266	-0.187
日光・鬼怒川		-0.044	-0.385	-0.292
千葉市・幕張		-0.771	-0.092	0.152
TDR		-1.410	0.526	0.977
成田		-0.243	-0.160	0.025
横浜		-0.551	-0.488	1.633
鎌倉		0.037	-0.559	-0.158
箱根		-0.692	-0.158	0.893
金沢		-0.456	-0.167	-0.377
富士山・富士五湖・富士急ハイランド		-0.748	-0.175	1.138
高山		-0.325	-0.156	-0.562
名古屋		-0.769	0.124	1.023
京都市		1.747	-0.677	0.293
大阪市		-0.983	1.146	2.010
USJ		-0.731	-0.046	-0.044
神戸・有馬温泉		-0.716	0.317	0.167
姫路		-0.221	-0.282	-0.497
奈良市		0.264	-0.195	-0.715
広島市		0.659	-0.578	-0.834
宮島		0.067	-0.443	-0.674
福岡市		-0.558	0.602	-0.756
大宰府		-0.633	-0.083	-0.360
別府		-0.533	0.025	-0.555
湯布院		-0.673	0.012	-0.415
長崎市		-0.463	-0.125	-0.360
ハウステンボス		-0.665	-0.062	-0.334
熊本市		-0.581	-0.039	-0.372
阿蘇山		-0.628	0.056	-0.496
那覇		-0.632	0.178	-0.561
沖縄本島		-0.724	0.171	-0.477

成分得点については、新宿、原宿のほか、大阪、北海道の札幌、小樽が高く、福岡も高い得点を得ている。一方、東京の象徴的な存在である皇居、東京タワー、銀座で大きくマイナスになっている。また、北海道や九州の福岡が高得点を得ているなど、比較的訪問する観光地が分散している傾向がある。

第3成分は約17%を説明しており、中国がやや強く作用している。成分得点の特徴として、大阪、名古屋といった関西、中部の中心都市が高い得点を得ているほかに、富士山、箱根が高い得点を得ている。一方、渋谷、原宿、六本木は大きくマイナスになっている。

強く作用する変数および高い成分得点を抜粋すると表9のとおりである。

表9 国・地域を主成分負荷量とした各観光地の主成分分析

成分	変数(国・地域)		成分得点		
	≥0.8	0.8> ≥0.6	≥1.0	1.0> ≥0.5	≤-1.0
第1	フランス 英国 その他	ロシア オーストラリア カナダ ドイツ 米国	渋谷 2.960 銀座 2.363 六本木 2.186 京都 1.747 皇居 1.683 新宿 1.586 原宿 1.569 東京タワー1.114 上野 1.096	東京駅周辺 0.951 浅草 0.914 秋葉原 0.835 赤坂 0.770 広島 0.659 品川 0.627	TDR -1.410 小樽 -1.047 札幌 -1.018
第2	台湾 香港 韓国	タイ シンガポール 米国 マレーシア ドイツ	新宿 1.396 大阪 1.146	札幌 0.706 福岡 0.602 原宿 0.591 小樽 0.588 TDR 0.526	皇居 -1.846 秋葉原 -1.653 東京タワー -1.272 銀座 -1.134
第3	なし	中国	秋葉原 3.691 浅草 2.080 大阪 2.010 皇居 1.699 横浜 1.633 銀座 1.498 東京タワー1.489 富士山等 1.138 名古屋 1.023	TDR 0.977 箱根 0.893 お台場 0.774	渋谷 -2.380 原宿 -1.961 六本木 -1.053

## 外国人観光客の訪日前に期待したこと、満足したこと

### 1 訪日前に期待したこと

訪日外国人観光客が日本に何を期待して訪日しているか、また訪日して何に満足したかという点に着目する。前述の2009年日本政府観光局(JNTO)による訪日外客訪問地調査の資料から、訪日前に日本に期待したものの数を変数として、訪日外国人旅行者の属する国・地域の旅行者数について主成分分析を応用して分析した。また、国・地域の特徴を出すために、国・地域ごとの割合を変数とした。初期の固有値を1以上と指定し、第2成分以下の解釈を分かりやすくするためバリマックス法による直行回転を行った。成分負荷量は表10、成分得点表は表11のとおりである。

第1成分から第3成分までで、約82%を説明している。

第1成分については約37%を説明している。「博物館・美術館」、「伝統景観・旧跡」、「大都市景観」、「現代文化体験・鑑賞」、「伝統文化体験・鑑賞」、「日本人の生活・交流」の変数が強くプラスに作用し、「日本の食事」についてもプラスに作用している。こうした点から第1成分は、「文化観光」を表している成分と推測される。成分得点を見るとフランス、ロシア、英国、カナダなど欧米からの旅行者が高い得点を示している。欧米からの旅行者が日本の文化面に興味を持って訪日していることが推測される。逆に、韓国、インド、香港、中国などアジア地域の旅行者の成分得点はマイナスとなっており、ここだけを見ると、文化面への興味は比較的低いのではないかと推測される。

次に、第2成分は約29%を説明している。「自然景観」、「温泉」の変数が強くプラスに作用し、「テーマパーク」、「ショッピング」についてもプラスに作用している。こうした点から「レジャー観光」を表している成分と推測される。成分得点は、台湾、香港、中国、ロシアで高く、インド、ドイツ、韓国、ではマイナスの値が強くなっている。韓国とインドを除けば、アジア地域で高い得点を示す傾向がある。

第3成分は約16%を説明している。「繁華街」、「スキー」の変数が強く作用している。成分得点は、オーストラリアが非常に高く、次いで香港が高い得点を



表 10 主成分負荷量表

	成分		
	1	2	3
伝統景観・旧跡	.927	-.015	.061
自然景観	.257	.926	-.122
温泉	-.245	.878	.030
大都市景観	.925	.150	-.158
繁華街	.344	-.058	.827
ショッピング	-.196	.693	.419
日本の食事	.682	.344	.316
日本人の生活・交流	.877	-.409	-.064
テーマパーク	-.385	.765	-.068
スキー	-.174	.437	.703
スキー以外のスポーツ	.445	-.266	.672
伝統文化体験・鑑賞	.875	-.268	.235
現代文化体験・鑑賞	.909	-.266	.147
博物館・美術館	.959	-.127	-.097
産業観光	.135	-.132	-.748
特になし	-.256	-.923	-.076
その他	.366	-.792	-.197
寄与率	37.3	28.9	15.6
累積寄与率	37.3	66.2	81.8

表 11 主成分得点表

成分 国・地域	第1	第2	第3
韓国	-1.546	-1.002	-0.300
台湾	-0.387	1.638	0.070
中国	-0.806	1.257	-0.975
香港	-0.874	1.550	1.005
タイ	-0.530	0.301	-1.293
マレーシア	-0.741	0.053	0.288
シンガポール	-0.689	0.631	0.364
インド	-1.041	-1.595	-0.752
オーストラリア	0.399	-0.106	2.723
米国	0.391	-0.832	0.101
カナダ	0.852	-0.291	0.480
英国	0.969	-0.573	0.448
ドイツ	-0.163	-1.426	-0.293
フランス	1.775	0.091	-0.377
ロシア	1.763	0.890	-1.551
その他	0.627	-0.586	0.063

ている。日本に訪れてスキーなどを目的に観光を楽しんでいると推測される。

## 2 訪日後に満足したこと

訪日後に満足したことについて、前述と同様に2009年日本政府観光局(JNTO)による訪日外客訪問地調査の資料から、出国時に日本で満足したものを変数として、訪日旅行者の属する国・地域の旅行者数について主成分分析を応用して分析した。初期の固有値を1以上と指定し、バリマックス法による直行回転を行った。成分負荷量は表12、成分得点表は表13のとおりである。

第1成分から第5成分までで、約90%を説明している。

第1成分は約43%を説明している。前述の「期待したこと」と同様に、「博物館・美術館」、「現代文化体験・鑑賞」、「伝統文化体験・鑑賞」、「伝統景観・旧跡」、「日本人の生活・交流」、「大都市景観」の変数が強くプラスに作用している。第1成分は、「文化観光」を表している成分と推測される。成分得点を見るとフランス、ロシア、カナダ、英国など欧米からの旅行者が高い得点を示している。前述と同様に韓国、香港、中国などアジア地域の旅行者の成分得点はマイナスとなっている。

第2分は約19%を説明している。「自然景観」、「温泉」の変数が強くプラスに作用している。「自然・温泉」を表している成分と推測される。成分得点は、台湾、ロシア、中国で高く、インド、ドイツはマイナスの値が強くなっている。

第3成分は約10%を説明している。「産業観光」が強く作用し、「テーマパーク」も作用しており、成分得点はロシア、インドが高くなっている。観光のみを目的としているというよりは、ビジネスを兼ねて観光をしている可能性がある。

第4成分は約10%を説明し、「スキー」の変数が強く作用している。成分得点は、オーストラリアが非常に高い得点を得ている。日本に訪れてスキーなどを目的に観光を楽しんでいると推測される。

第5成分は約9%を説明し、「ショッピング」の変数が強く作用している。成分得点は、香港が非常に高い得点を得ている。中国では、香港を「ショッピングの天国」と呼んでいるが、香港からの訪日客にとってショッピングの満足度が高いことは注目に値する。

最も旅行者数の多いのが韓国であるが、国・地域ごとの割合を変数としたため、韓国の特徴が現れなかった。これとは別に、割合ではなく訪日旅行者の数で主成

分分析をしたところ、訪日前に期待したことで、「特になし」が最も強く作用した。距離的にも近いため、特別に期待をしないで観光をしているという推測も成り立つと思う。ただし、同じような距離である台湾との違いは明確ではない。

表 12 主成分負荷量表

	成分				
	1	2	3	4	5
伝統景観・旧跡	.928	.073	.027	.005	.102
自然景観	.258	.908	.071	.006	.187
温泉	-.364	.848	-.209	.158	-.055
大都市景観	.888	.231	.242	-.013	-.187
繁華街	.536	-.312	-.317	.329	.466
ショッピング	-.115	.293	.011	.093	.926
日本の食事	.682	.135	-.422	.042	.316
日本人の生活・交流	.956	-.203	.099	.041	-.089
テーマパーク	-.273	.567	.574	.362	.199
スキー	-.013	.109	-.075	.938	.153
スキー以外のスポーツ	.700	-.034	.022	.674	-.117
伝統文化体験・鑑賞	.935	-.192	-.247	.028	.101
現代文化体験・鑑賞	.947	-.051	.001	.193	-.034
博物館・美術館	.974	-.093	.069	-.071	.018
産業観光	.168	-.091	.947	-.120	-.048
特になし	-.378	-.739	.030	-.069	-.318
その他	.494	-.718	-.064	.147	.055
寄与率	42.5	19.4	10.0	10.0	8.6
累積寄与率	42.5	61.9	71.9	81.9	90.5

表 13 主成分得点表

成分	第1	第2	第3	第4	第5
国・地域					
韓国	-1.406	-0.727	-0.552	0.107	-2.581
台湾	-0.786	1.441	-0.315	-0.079	-0.344
中国	-1.108	1.136	0.458	-0.286	-0.457
香港	-1.136	0.787	-0.424	0.149	2.118
タイ	-0.498	0.661	0.877	-0.853	0.180
マレーシア	-0.677	-0.227	0.060	0.451	0.613
シンガポール	-0.872	0.386	-0.490	-0.215	0.460
インド	-0.450	-2.227	2.217	-0.278	0.668
オーストラリア	0.415	-0.328	-0.705	3.336	0.124
米国	0.757	-0.464	-0.472	-0.504	0.025
カナダ	1.017	-0.429	-0.581	-0.282	1.029
英国	0.976	-0.278	-0.895	-0.394	-0.464
ドイツ	-0.020	-1.210	-0.736	-0.571	-0.532
フランス	1.703	0.733	-0.770	-1.085	-0.130
ロシア	1.498	1.379	2.299	0.788	-0.910
その他	0.586	-0.633	0.030	-0.284	0.200

## おわりに

入出国空港（港）については、北海道、九州、沖縄はそれぞれの空港圏を持ち、本州については、成田空港が玄関口となり、その中に関西空港と中部空港の空港圏が存在している。訪日外国人の属する国・地域による違いは、主に成田空港を利用する欧米諸国と比較的広範囲に空港を利用するアジア諸国の違いがあった。訪日前に期待すること、または訪日後に満足したことを主成分分析することで差異がさらに明らかになった。主に日本の文化面に興味を持つ欧米諸国からの旅行者、自然景観や温泉に満足を得るアジア諸国からの旅行者、スキーに特化したオーストラリアからの旅行者、産業観光に特化したインドおよびロシアの旅行者、ショッピングに特化した香港の旅行者という特徴があげられる。

観光は経済波及効果の高い産業であり、日本経済、特に地方の経済が停滞から抜け出す切り札となる産業である。現状では、日本人の国内旅行は宿泊数、回数共に減少している。今後も休暇取得の増加などの要因がなければ、国内旅行者が伸びる見込みは高くない。ところが、訪日外国人旅行者は他の諸外国と比較しても受け入れ数が少なく、今後まだまだ伸びる余地がある。そこで、外国人観光客（旅行者）を増やす必要があるが、外国人の訪日先は東京および3大都市部、あるいは北海道、北九州に集中する傾向があり、他の地方へ誘致し、いかにして経済効果を地方にいきわたらせるかという課題がある。今回の分析では、訪日外国人の期待しているものの傾向について若干触れることはできたが、地方の観光産業の育成につながる指標としては不十分なものである。この点は今後の課題として、これからも訪日外国人旅行者の推移に注目していきたいと考えている。

## 注

- 1 2010年日本観光学会中部支部研究発表大会での発表をもとに著したものである。
- 2 JNTO 訪日外客訪問地調査2009の調査の概要

調査対象：日本旅行を終え、新千歳、仙台、成田、羽田、中部、関西、那覇の各国際空港および博多港（海港）から出国しようとしている滞在期間2日以上、

90日以内の外国人旅行者

調査時期・標本数：計 15,255 票，内訳：2009 年 1 月～2 月 (4,417 票)，7 月～8 月 (5,181 票)，10 月～11 月 (4,962 票)

- 3 国土交通省総合政策局観光経済課「旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究」の概要についてから引用。
- 4 2010 年日本交通学会シンポジウム観光庁講演資料から一部を引用。

## 参考文献

- 石村貞男・劉晨『多変量解析による環境統計学』共立出版，2009 年  
 小田利勝『SPSS による統計解析入門』ブレアデス出版，2007 年  
 神頭広好『都市の空間経済立地論 - 立地モデルの理論と応用 -』古今書院，2009 年  
 神頭広好『観光都市，大都市および集積の経済』愛知大学経営総合科学研究所叢書 29，  
 2006 年  
 松尾太加志・中村知靖『誰も教えてくれなかった因子分析』大路書房，2002 年

## 参考資料

- 国土交通省総合政策局観光経済課「旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究 2007  
 年度旅行・観光消費動向調査結果と経済効果の推計」，2008 年  
 日本政府観光局『JNTO 訪日外客訪問地調査 2009』，2010 年  
 22 年版観光白書 <http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/whitepaper.html>  
 観光庁ホームページ <http://www.mlit.go.jp/kankocho/about/index.html>  
 日本政府観光局ホームページ <http://www.jnto.go.jp/jpn/index.html>